
Eternal + dream.

春夏秋冬 隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l + d r e a m .

【Nコード】

N 5 8 7 3 A

【作者名】

春夏秋冬 隼人

【あらすじ】

突然の引越して転校した大沢一樹。そこは初めて知らない土地なのには自分は知らないはずなのに自分のことを知っている人がいた！！

D r e a m - 1 「引越し・・・そして、」

「ふう〜〜、やっとついたな。」

新幹線に揺られて約二時間ちよい、

父の転勤の都合で東京からここ 京都 に越してきたんだ、

あ、俺の名前は大沢一樹ってつんだ、よろしく。ちなみに歳は17だ。よろしくな。

「あー、はらへったー」

今は大体午後2時ちよいですか、

本当なら朝には付いてたんだがな、

家族はみんな深夜バスにのって来たからもう新しい家に付いてるだろうけど、

おれは車系は酔っちゃってめつきりダメなんだは・・・・・・
だから一人だけ車なんです、はい。

さて、家へ向いますか、

「へい、タクシー」

なんてあほな事を叫びつつタクシーを拾って、いざまだ見ぬ新居へ向った。

「うおえ、クソ、やっぱり酔っちゃまった・・・」

車はやっぱりめっぽうだめだ、

タクシーに乗っていきなり吐きかけた、

何とか”吐く”と言う最悪の事態は回避できたが、俺って三半規管が本当にしょぼいな。

ガチャ

「ただいま、ってかこの家来るの始めてだけどネ、」

「おお、やっと来たか、遅かったな一樹。」

「ちよつとタクシーで酔っちゃってゆっくり走ってもらってたから、」

「お前、車はめっぽうだめだなあ、」

「ところでオヤジ、にーさんやねーちゃんは？」

「2階で自分の部屋でも決めているだろ、それよりも一樹、話が・・・」

「悪いけど後してくれない、俺も自分の部屋見てくる。」

そう言う俺はオヤジが後ろで何か言っているにもかかわらず2階への階段を登った、

ちなみにさっきの俺のオヤジの大沢哲也、それに俺には兄と姉がいる。

兄は大沢葵って言うんだ、”あおい”って女みたいな名前してるけど一応俺の兄だ、

今年でちょうど20の兄は今は現役の大学生だ、

そして姉は大沢日衣菜って言って俺の一つ上だ、

引っ越し前は違う学校に通っていたがこっちに転校してきてからは

同じ高校になるらしい、
なんかいやだよな、姉弟が同じ学校にいるのも。

上にあがるとにーさんとねーさんが何処にいるのかはすぐにわかった。

「この部屋は俺のだ、お前は出てけ。」

「何だよ、普通、一番大きい部屋は年下に譲るものでしょー!」

「じゃあ、日衣菜は一樹にゆずれるのかよ、!」

「それとこれとは話は別でしょ!、大体一樹はにーさんと違ってがめつくないから、

快く譲ってくれるはずです。」

「はいはい、そうですか。でも、俺はがめついから譲らない!」

「そんなんだから彼女の一人もできないんですよ。」

「うるさい!、それこそ関係ない話だろ!」

ああ、またやってるよこの二人・・・・・・・・

なにかと色々な事で喧嘩するよなあー

仲が良いのか、悪いのか、どっちだろうな、

まあ、俺には関係ないか・・・・・・・・

「あのー、お二方? じゃんけんなどで決めてはいかがですか?」

「「ああゝ。」」

怖!! 怖!! 怖!! 怖!! 怖!!

力ナリ怖!!

「あのー、2人ともめっちゃ顔怖いんですけど・・・・・・・・。」

「ああ、一樹か、遅かったなやつぱり酔ったんだろ。」

「ああ、でももう大丈夫。」

「あんた、それなんかなんなの？致命的よ、」

「しょうがないだろ、酔わないねーさんには関係ないよ。」

「そうね、でも関係ないことはないわ。だから明日から特訓しましょうか、にーさん。」

「おお、それいい考えだ日衣菜。どうだ一樹？つて何処へ行った。」

ヤバイ、ヤバイ。

ねーさんの考え付くことで俺にとって有益なことなんて一つもない。それにいつもなら止めるにーさんが乗るんだもん、絶対やばいよ。他の部屋でもみようと。

そして新居を探索し尽し日が地平線に沈む頃、俺はあることに気づく

「な、にーさん。」

「ん？なんだ。」

「俺の荷物なくない？」

結局、じゃんけんで勝ったのか知らんがさっきの部屋で荷物の整理をしていたにーさんが切れが悪そうに言い返してくる。

「そーか？ああ、アレだ日衣菜のところにもまぎれてるんじゃないのkrdf tgyhujiko」

「にーさん、呂律が回ってないよ。」

「そ、そんなことないぞ、日衣菜のとこ行ってこいよ、きっとそこだぜ。」

「ねえ、ねーさん。」

「なに？何か用？それと部屋に入るときはノック必須よ！！前から言ってるでしょ。」

「ああ、ごめん急用で忘れてた、で俺の荷物知らない？二階の何処探してもないんだけど？」

「え、あー、あれ？荷物ないんだ、此処にはないわよ、きつとにーさんの所じゃない？」

「先にーさんのところに行ってきました。」

「あゝそうなの？、じゃあ下じゃない？父さんに聞いてみれば？」

「わかったよ、そうしてみる。」

そう言ってねーさんの部屋を出ると先ほど上がって来た階段を下り始めた。

D r e a m - 2 「いきなりすぎる宣告」

階段を降りて下の階に行くとオヤジも下で荷物の整理をしている所だった。

「ねー、オヤジ？」

「なんだ？一樹」

「俺の荷物知らない？家中捜しまくったんだけど何処にも見つからなかったんだけど？」

「ああ、おまえの荷物ならそこにあるぞ。」

そこには確かにダンボールはあった……。

でもそこにはどう考えても一箱しかない。

俺が荷造りしたときは……13個、いや、とにかく10個以上はあったはずだ。

「あれ、これだけ？」

「そうだぞ、明日から行く学校の制服に鞆など、学業道具だ、」

「残りは？机とか漫画とかゲームとかゲームとかゲームとかは？」

「ああ、それをさっき話そうとしてたのにお前が上に行くから話せなくなっただんじゃないか」

「で、残りの荷物は、」

「おお、それだよ。お前、お爺ちゃんがアパート経営してるの知ってるだろ？」

「ああ、ま、まさか……」

「ああ、そのまさかだ。お爺さんの所に送っておいた。」

「何でだよ！どうしてそうなるかなあ。せめて当事者には事前に理由くらい言え！」

「まあ、まあ、落ち着け。今度からは言うようにするから、」

「今度があるのかよ！で、理由は？どうしてこんな事を？」

「それはだなあ、お爺さん、すなわち私の父だが、なぜだかな急に世話係がほしって言うてきたんだ、まああお爺ちゃんも年だからそついう介護役がほしいのは解るが赤の他人に任せたくないらしい、だから身内からお前が選択された。」

「それはわかるけど、だからってこんな急・・・」

「心配するな、わが息子よ。お爺ちゃんが給料代わりにアパートの空き部屋をタダで貸してくれるらしいぞ、そうなれば念願の一人暮らしができるぞあゝ、どうだあゝ？いい条件だろ？」

「た、確かに前から一人暮らしはしてみたいって行つてたけどよ、でもこんな急には・・・」

「「ちよゝと待った」」

俺の言葉を遮つて現れたにーさんとねーさんは開口一番オヤジにむかつて異論をとねえ始めた、

「俺はそれには反対だあゝ」

「もちろん、私も！」

「おまえたち、いまさら反対って言つても仕方ないだろ、」

「じゃあ、一樹が消えたら誰がご飯作るんですか？」

「そうだよ、俺たち作れないぞ！」

「にーさんそこ威張るところじゃないぜ」

「そんなもん、父さんが作るじゃないか、」

「「それはダメだ！（よ！）」」

二人がキツク反対するのがよくわかる。

昔、父さんの作った料理を食べたことは在るけど、ものすごく不味い。

というか不味いの前にあれは料理と呼べるのだろうか？

幼い頃の自分は純真無垢で疑うことを知らずそれが食べ物だと思い込んでいた。

だが今思うとあれは形からして料理ではなかったんじゃないかと思う。

そして今までの会話から解るようにこの家には母親というものがない、俺の小さい頃に死んでしまったので残っている記憶は少ない

だからこの家の食事はもちろん家事全般は俺がこなしていた、

「冗談だよ。私も、もう作るつもりはない。」

「じゃあ、ご飯はどうなるんですか、とーさん」

「そうだよ、それに一樹の病気は？起こつたらどうするんだよ、」

「俺のことなら心配要らないよ、にーさん。この頃は落ち着いてきたし別に大丈夫。」

「落ち着いたとかそういう問題じゃなくてだな一樹……」

「本当に大丈夫だって、」

「ほら葵も一樹が大丈夫っていつてるんだから信じてやりなさい」

それに追記しておく俺は二重人格なんだ。

小さい頃に母親をなくしたそのショックか知らないけど俺は母さんをなくしてすぐ二重人格になったらしい。

そのため俺にはもうひとつの人格が在り、その人格は俺の小さい頃のまま成長が止まっちゃってるらしい。

俺が母さんをなくしたのが5〜6歳ごろだから俺のもうひとつの人格はその年ぐらいだろう。

俺には5〜6歳以前の記憶の大半がないすべてもう一人の俺のほうに流れてしまっているらしい。

そのため俺は小学生以前のことは何も覚えていない。

俺は実際にその人格を見たことが無い（見れるわけ無いよね。）うえに変わっている間の記憶が無いためどのような子なのかは知りようが無い。

でも最近は人格が変わるそぶりも無く、もうまったく問題ないと言っても過言ではない。

「わかったよ、でもメシはどうするんだ？掃除や洗濯は俺達がやってもいいけどメシは無理だぞ、」

「にーさん、掃除や洗濯できるんなら一樹を手伝ってあげたらどうなんですか？」

「そうだよ、ねーさんの言う通りじゃん」

「そこは気にするな、本題からそれるぞ。で、父さんどうなんだ？」「そうですねご飯は出前でもしてればいいでしょう。」

「マジかよ（なの）！！」「」

「まあ、そのうち葵たちに作ってもらえるようになってもらいますけどそれまでなら出前でいいんじゃないでしょうか？」

「まじかよ、最高じゃん」

「あー一樹？おねーちゃん達全然心配してないから安心して行ってくるよ。」

「そうだよ、一樹。一生懸命世話してこい」

この兄妹はどれだけ変わり身がはやいんだよ、メシが外食だ出前だって決まった瞬間態度360度変えやがって、どんな神経してるんだ？

「一樹、お兄ちゃんから忠告。」

「なんだよ、」

「360度も態度変えたら一周してきちゃうぞ」

「ぐわあは、しまった……。あれ？でも声に出して言ったっけ？」

「一樹の考えてることなんてわかりすぎなんだよ！」

「そうよ。一樹は馬鹿なんだから。」

「あんたらカナリ酷いな……」

「そうか？にーちゃんはそんなこと無いと思うぞ。」

「そうよ、私達なんて序の口よ。」

「一樹がナイーブ過ぎるだけだな。」

「一樹。そんなことよりお腹減ったからご飯早くつくって」

「ねーさんも少しは手伝って」

「えゝめんどくさゝい。にーさんにバトンパスです。」

「俺も父さんにパス。」

「一樹にパスだ。よろしくな」

「「よろしく」」

俺はテレビを見ながらくつろぐ我家族に心の中で愚痴をこぼしつつ俺は晩飯を作り始めた……

D r e a m - 3 「初登校・・・」

「はあく疲れた。」

そう言つて寝転んだ先はベットでも布団でもなくただのソファだ。

「今日はいろいろあつたね」

そうつぶやいて寝返りをしたいところだがそうもいかない、これはソファなのだ。

もちろん自分のベットは今はその他の荷物といっしょにお爺さんの家に在るだろう。

そのため今日はこのソファで寝るしかないのだ。

「明日から新しい学校があく」

そんなことをつぶやき明日の学校がどんな所なのか勝手な想像を膨らます。

学校の外観は今日この家にくる途中のタクシーの窓からみえた。

外見は一瞬だけだったがきれいな学校に見えた、

行くには確か電車で3駅だな、

頭の中で学校への行き方を復唱して俺は深い眠りに落ちた・・・。

朝・・・・・・、

眼を閉じているのに明るい日差しが見えた、

横ではうるさく鳴る携帯のアラームそして騒ぐねーさん、
眼をあげ体を起こし携帯のアラームを止め辺りの状態を確認する。

時間　　．．．．．まだ十分ある、

用意　　．．．．．昨日のうちにした、

問題点．．．．．ねーさん、

状況確認が終わると俺は顔を洗いに洗面所に向かう、

「もー、ちよつとどこにあるのよ、」

相変わらず何かを探すねーさん、
正直もうそろそろ朝から周りをばたばたされるのがうっとうしくな
ってきたので声をかける。

「ねーさん、何に探してるの？」

「ん、あれと、あれと、あれもだし．．．．．あつ、そうそうあ
れ探さなきゃ！」

「ねーさん、アレばつかじゃ何を探してるのかぜんぜん部外者には
理解できないよ！」

「そう？一樹ならわかってくれると思ったのに？」

「期待に添えなくてすみません。で、なんなの？」

「ん、学校のセットが入った箱。いっぱい箱在ってどれかわか
らないのよ、」

ご愁傷様。

探すのを手伝ってあげたいところだけあれだけ余裕だった時間が
今ではもうすぐ家をでるべき時間をさす。

俺の箱はひとつしかないから何処に何があるかなんて一目でわかる。

「ねーさん？」

「なに？あつた？」

「もうそろそろ家を出るべき時間だよ、って教えとこうと思って。」

「えっ、マジ！うわぁ本当だ。こんなことならにーさんみたいに昨日のうちに整理終えときゃ良かった。」

「そう言うのを自業自得っていうんだね、じゃいつてきまゝす。」

「こらゝ、探すの手伝えゝ。この薄情ものゝ、」

後ろでねーさんが騒ぐのも軽くあしらい玄関のドアを閉めて1日だけだった新居を眺める。

今日からこの家には帰らない、引っ越したのだがこの家ではない。今日からはお爺さんの家に帰ることになる。

「いつてきます」

俺は家に向かってそう言うのと駅への道を歩き出した。

電車で3駅、俺が通うことになるこの高校はそんな距離に在る。

乗るときには自分くらいなものだったこの制服を着ている人も一駅、また一駅と近づくにつれて数を増し降りる頃には回りは同じ高校の制服を着た人の波に飲まれていた。

そのなかには自転車で登校するもの、走るヤツなどたくさん居る。

この中に同じクラスになるヤツは居るのかな？などと考えながら学校への足を一步、また一步と進める。

雲が綺麗だ。

新しい生活を踏み出すには最高の日だ、

そんなこんだで見えてきた校門をくぐると昨日見た通りの綺麗な校舎が見えてきた。

校舎に入ると案内板に書いてある職員室に向かい歩き出す。
職員室の手前まで来るとなにやら何処かで聞いた事があるような声
が聞こえてきた。

まさか……。

ヤツは俺より後に家を出たはずだ。

次の電車に乗れたとしても先にいった電車を追い越せるわけがな
い。

いや、まてよ。

………。

………自転車か!!

でもそんな体力がヤツにあるとはおもえん。

よって自分の思い過ごしだろうと結論づけ職員室のドアを開けると・
………。

「一樹。おそかったね。」

中からは待つてましたとばかりにねーさんが声をかけてきた。

俺がその場に驚き呆れているような顔で立っていると一人の若い男
がこちらに近づいてきた。

「君が弟の大沢一樹君だね？僕は君の担任になる田島だよ。よろし
くね。」

「あつ、はい。よろしく願います。」

声をかけてきた田島先生とやは

年齢 27?

外見 体育会系？

性格 でもしゃべり方はゆっくり （一樹調べ）

という風な感じで外見と性格がこれほどミスマッチな人もそうめったにお目にはかかれなないと思ったりした一樹であった。

そうこうしている内に職員室での諸事情の説明が終わってねーさんと別れて田島先生の後を歩いている。

「はい、ついたよここが今日から君のクラスの2年3組だ。」

「はい。」

われながらなんとも事務的な返事だ。

「みんないい人だから心配する事はないよ。じゃあ入って。」

そう言われて田島先生の後について入った教室には大体生徒が30人弱、男女比率は13対17くらいで女子のほうが多い。

「はーい、みんな聞いてくれよ、転校生です。じゃ、なんか喋って。みんな、質問は聞いてからだぞ。」

そう言っていると田島先生は黒板に俺の名前を書き出す。

「はじめまして、今日からこのクラスになりました大沢一樹と言います。当然だけどまだこの学校の事やこの近くの地理についてなんて全然わからないのでなにかと聞くかもしれませんがよくお願いします。」

「はい、有り難う大沢君。って事だからお前らわかったな。」

「はい！質問！」

「おれも、いいですか？」

「えっなに？ホームルームの時間終わりそうだしな、一つだけだぞ、いいかい？大沢君」

「あっはい、いいですよ。」

急に話を振られて驚く俺。

「じゃあ、代表で朝永、」

「へーい、じゃあ質問おｓ．．．」

「ハイ残念時間切れ、ハイさっさと座る。」

そう言われて朝永と言われた生徒はキビキビト席に着く。
それにしてもこの先生何がしたいんだ？

「じゃあ大沢君はあの席にでも座つといて、たぶん席替えると思うから。」

「あっ、はい。」

それだけ告げると先生はさっさと教室から出て行った。

D r e a m - 4 「朝的一幕」

言われた席につくとそこはさつき田島先生に朝永と呼ばれた生徒の後ろだった。

「俺は朝永だ、朝永和真ヨロシクな、」

そう言うのと片手を俺のほうに出してくる。
それを握り返し握手をして。

「こちらこそヨロシク。」

そう言い返した。

「じゃあ転校生、本題に入っているかい？」

「なんだよいきなり、それに転校生って呼ぶのはやめてくれ。それ以外だったら何でもいいから。」

「O〓K〓、わかった。じゃあ下の名前で呼ぶ。お前も好きに読んでくれていいぞ。」

「わかった。じゃあ悲劇君。」

「なんでだよ!!」

「だめか？」

「何処の世界の人間が初対面のヤツに”悲劇君”って名前付けるんだよ!!」

「なんで？アンタさっきの質問の時と言いななんか悲劇だな」とおもって、

「ああ、さっきの質問は悲劇だな、まっタジヤンはあんな調子の人だから覚えときな。」

「”タジヤン”？」

「ああ、さっきの田島先生のこと皆からはタジヤんって呼ばれてるんだ、」

「へえ、覚えとくよ悲劇君」

「だから悲劇君って呼ぶ名つての!!」

「じゃあズッキーニで、」

「あんた人のあだ名考えるの趣味か？」

「まあ適度に。で、さっきなんか言おうとしてなかった？」

「ああ、そうそう。さっきの質問だけどね・・・」

「そいつの質問に答えないほうがいいわよ、転校生。」

ズッキーニ（俺の中のあるあだ名に決定!!）との喋りを中断された声の主のほうを向くとそこには一人の女の子が立っていた。

その子は綺麗な黒髪を下ろしていてこちらを正しくはズッキーニを威圧的に見ていた。

「なんだよ、蒼依。俺が今一樹と喋ってたんだ、邪魔すんなよ。」

なんと呼んでもいいって言ったけどいきなり名前はちょっと抵抗が・・・

と言う俺の叫びも悲痛に会話は続く。

「アンタまた色々聞き出そうとしてたんでしょ？」

「あつ、ばれてた？」

「当たり前よ!!何年アンタの監督役務め上げてきたと思ってんのよ!!」

「なあ、ズッキーニ？この人は誰だ？」

「ああ、コイツは・・・」

「あんたに言われなくても自分で言います。私は朝倉蒼依ヨロシク転校生。」

「だから、その転校生ってやめて、」

「ああ、イヤなの？私一回転校生を転校生って呼んでみたかったんだけど？」

「なあズッキーニさんこの人ちよつとアレですか？」

「ああ、おかしいな。コイツとは長い付き合いだが初めてきずいた。お前のおかげだ礼を言う。」

「いやいや、気にするな。友情への第一歩って事で、」

「いいこと言いますな、あんさん」

「あんた達そこ二人で何こそそやってんの？」

「「いえ、お気になさらず」」

「まあいいわ。とにかく大沢君？だっけ、和真に何質問されても答えないことね、」

「なんで？」

「コイツはここいらでは”パパラッチ”の異名を持つ男よ。」

「パパラッチ？」

「コイツに話なんてしたら次の日にはある事ない事が噂になって町中を駆け回るわよ、」

「ズッキーニってそんな嫌なやつなの？」

「一部のものが俺の情報力を疎んでそのような噂を流したようだが、初対面のヤツにズッキーニって言うあだ名をつけるヤツよりかはひどくないぞ！！」

「ああ、じゃあ普通に呼ぶよ。」

「じゃあ、授業始まるから席戻るけどとにかく和真に何質問されても答えないことよ」

「わかったよ、えゝ、名前なんだっけ？」

「一樹、お前物覚え悪いな、」

「言っつな、」

「ああゝ、もう、ちゃんと覚えなさいよ朝倉蒼依です。」

「ああゝ、おーけーおーけー完全に覚えた。にーさんと名前が一緒だ。」

「そうなんだ。」

そう言う朝倉蒼依は自分の席に戻っていった。

それにしてもにーさんと同じ名前の女の子がいるとはなあゝ

前からにーさんの名前女っぽいつて思ってたけど何かほんとに名前付いてる人がいるとつくづく実感するなあゝ

しかし”葵”と”蒼依”か、字似てるかな？

D r e a m - 5 「昼の一幕」

キンコンカンコン

ベルがなる、授業がおわり昼休みがくる。

腹が減った、

そりゃそうか昼だもんな、

そつえばこの学校には食堂があるはずだ！

財布を確認・・・

・・・

・・・

・・・

・ 中身は少ないが昼ご飯という出費には耐えられそうだな、

そうとなれば善は急げだ！

「なあ、ズッキってい！違う！違う！なあ和真こっつて食堂あるんだろ？」

「まあ、あるけど？一樹は弁当じゃないのか？」

「ああ、普段はわかんねえけど今日は朝、いろいろあったからな。だから、つれてけ、たのむ！」

「えー、俺弁当なのにー」

「そこをまげてたのみますっ！」

「ちえ、しょーがねーなあ」

「さすが、そうこなくっちゃ！」

そつ言う俺は立ち上がり和真のあとについて歩く、

食堂までの道程で俺はついだとかいって和真に学校を案内してもらった。

和真の話によるとこの学校は校舎が5棟在りすべての校舎はわたり

廊下でつながっていて

形は漢数字の3の両端に2本縦線を引くと出来る形に近く具体的に
は「三」な感じ。

校舎は漢数字の部分は上から北棟、中央棟、南等。

あとの両端は言わなくてもわかるだろうが西棟と東棟。

そして食堂は西棟にある。

「はい、そしてここが食堂。」

「ありがとさん、へー結構綺麗なんだな。」

「この食堂が完成したのがまだ半年くらい前だからな。」

「へー、そうなんだ。で、どうすんの？」

「まず、そこで食券を買う。」

和真が食券の販売機を指で示す。

「そして、あそこで渡す。」

そして、厨房みたいなカウンターみたいな場所を指す。

「そして食う。」

そして、席の群を指す。

「的確な指示をありがとう。」

「きにすんな、これも何かの縁だ。」

「そうですかと、」

そう言うと俺は自販機に向う。

……ん~~~~。

迷うな・・・、

カレーにすべきかラーメンか？

迷う、

他に食いたいものはあるのだが俺の財布が以外にも少なくともこの二つ以外に耐えられそうにない。

「ちっ、しょうがねー」

そうつぶやくと俺はラーメンのボタンを押した。

「かつてきたか？」

「ああ、待たせたな。」

ラーメンを持って帰ってきた俺を先に席に座っていた和真が待受ける。

和真はそこで持参の弁当を広げている。

「「じゃあ、いただきます。」」

叫んでお箸を口に運ぼうとしたその刹那。

「つとまつた~~~~~~~~。」

「なんだあ？」

奇怪な声を出す和真。

「ねーさん！？なんでこんなところに？」

先ほどの声の方向を向くとそこにはねーさんがさっきの・・・..
え、・・・

誰だっけ？

あっそうそう、朝倉蒼依ともう一人誰かの合計三人が立っていた。

「あの人お前のお姉さんなの？」

奇怪な声でたずねる和真。

「ああ、そうだよ。でもねーさん何で朝倉さんと・・その他一名は誰？」

俺はそういつて朝倉さんの隣にいるすぐく澄んだ綺麗な青い目で髪の毛をポニーテールにくくった女の子を指差した。

「ええ！！、覚えてないの！？」

そういつた俺に指差していた少女が叫んだ、

「私よ、私。蒼井優華、覚えてないの？」

んゝ、蒼井優華・・・。。。

どこかで聞いたような、思い出せん。

えーっと、落ち着け、良く思い出せ・・・。。。

蒼井優華・・・。

蒼井優華・・。

蒼井優華・。

「あっ！」

「思い出した！？」

蒼井優華が希望の眼差しをこちらに向けてくる、が・・・。。。

「いや、まったく」

「……………紛らわしい事言わないでよ!!」

「ぐうへっ……………」

俺が言葉を発してから少しの間を空けて蒼井優華が叫ぶ、
だが俺はその言葉を聞き取ることは出来なかった。
気づいたときには時、すでに遅し。

蒼井優華の回し蹴りが俺の腹にクリティカルヒット!!
俺のHPは瞬間的になくなり地面に倒れこむ。

俺が最後に聞いた言葉はすでに弁当を食い終わった和真の、

「冷めると困るからラーメン貰っとくな」

というのんきな一言だった。

D r e a m - 6 「下校時の一幕」

「ん、つてえ」

目を覚ます。

どうやらここは独特の匂いからみて保健室のようだ、

俺はどうしてここに……

ああそうだ、蒼井優華に殴られて……いや回し蹴りを喰らって……

……；（ノ、）ノ ヒイイイ

そのあとは思い出したくもねえ……。悪夢だ。

「今何時だろ？」

何時間ぐらい気を失ってたのか気になりふと疑問に思い時計を見ると、

「5時か、つてい。もう五時かよ!!」

外を見るともう秋だけに日は地平線の下にもう入り始めていた。

「帰るか、鞆取りに行かなきゃ。」

ガラッ

俺が立ち上がろうとしたそのとき保健室のドアが開きねーさんと蒼井優華が入ってきた。

「一樹、大丈夫!？」

入ってくるなり蒼井優華が俺の腹にダイレクトアタックで飛びついてくる。

「ぐへっ!!」

もちろんベットの上がった俺はよけるすべもなく……。

悪夢再び……。

そんな感じだった。

「おい、お前。誰か知らんが急に飛びつくな!!死ぬかと思ったぞ!!」

「ごめん、一樹。つい心配で。」

「てか、あんたのせいで午後は気を失って過ごしたぞ、いったいどんな蹴りだよ!!」

「回し蹴り。」

「ったあゝ。聞いてねーよ!!」つか初対面にいきなり蹴るやつがいるか!!」

「ここに、ってちよつと!!私と一樹は初対面じゃないわよ!!」

「はあゝ?何言ってるんだよ、俺は昨日越して来たばかりだぜ?」

「昔この町に住んでたでしょ?」

「住んでねーよ!!」じーちゃんの家遊びに来たときはあるけどアソビみたいなヤツにあった覚えはねーよ!!」

「嘘!!おねーちゃん私の事憶えてたわよ?」

「お前がおおねーちゃん言うな!!」

「いいじゃない、昔から呼んでるじゃない」

「そっなのねーさん?」

帰り道で蒼井優華が言う。

あのあとフリーズした蒼井優華をねーさんと二人で復活させねーさんが一通り説明した。

説明が終わるとねーさんは先に自転車で帰って行った。

”ちっ、朝はあの自転車に負けたのか”

っと思いつつ帰る道の方が蒼井優華と同じなので仕方なく一緒に帰っている。

「言ってくれたらっってお前昼間俺が何か聞く暇もなく蹴っただろ」

「あれ？そうだったっけ？」

「うん」

「気にしないで、終わったことは水に流しましょう」

「お前が言えることかよ、」

「あはははは、気にしない、気にしない」

「ところでお前は俺をなんでしってるんだ？」

「もっ、お前って言わないでよ。昔みたいに優華でいいよ」

「昔みたいにつて昔が覚えてないのにそんなん呼べるわけないだろ
！！」

「もっシャイだなっ、一樹は」

「そっ、そんなことよりなんなんだよお前は？」

「ほんとに忘れたの？あんなに深い関係だったのに……」

「だからっ、その意味ありがちな笑いはやめろ！！」

「あははは、からかいがいがあるなっ一樹。昔と変わらないよ」

「その昔のことを話してほしいのですが？」

「知りたい？」

「知りたい」

「昔ね、一樹は私の家の隣に住んだの、昔は毎日のようにおねーちゃんと一樹たちと遊んですごしたねっ」

「へー、そんな過去があつたのか・・・」

「そうだよ、ダカラ私と一樹は幼馴染で恋人よ、」

「いや、ちょい待て、幼馴染はわかるけど何故に恋人？」

「ええ！！覚えてないの？あんなに情熱的な告白をしいて忘れたの？それにあんな事も・・・」

自分で言つといて顔を赤くする蒼井優華。

一体俺の過去に何が？

「いや、だから覚えてないんだつて」

「浮気！！その歳で！！女でもいたの？」

「いや、そんなのいん・・・」

「一樹のバカヤロ〜」

俺の言葉が途中で詰まる。

そしてまたまた回し蹴り。

だがある程度予想できた範囲なので軽くよける。

そうすると空を切った蒼井優華のキックは外れ遠心力でそのままこけてしまった。

「いった〜い、何であたつてくれないのよ！！」

「馬鹿かお前、俺が痛いじゃん。」

「ばかつてゆーな、それにお前つて呼ばないで」

「じゃあなんと呼べと？」

「昔みたいに”優華”って呼んでよ〜」

「ばつ、馬鹿やろう！！初対面の人をいきなり下の名前で呼ぶとかそんな恥ずかしいことできるかよ！！」

「も〜シャイだな〜、一樹は」

「シャイって言っな！」

「じゃあ呼べるの？」

「ゆ、ゆ、優華」

「良く出来ました。これから毎日その調子でね」

「恥ずかしくて死にそうだよ。ってかお前何処まで着いてくるの？」

「何処までって、私帰り道こっちなよ」

「へえ、そうなんだ」

「何？一樹は私の家知りたいの？」

「いや別に、だからその含み笑いはやめて、」

「私は知りたいな」

「何を？」

「一樹の家に決まってるじゃない。おねーちゃんと方向違うかったみたいだけど別々に住んでるの？」

「ああ、まあな。じーちゃんそこ、」

「一人暮らし？」

「まあ、一応は」

「ナイス!!」

「なんかいった？」

「何もないよ、気にしない。気にしない。っておじいさんのところに住むの？」

「うん、アパートの部屋一個借りてさ、」

「へ、っておじいさんのところアパートって言うよりはマンションだよアレは」

「マジ!!おれアパートって聞いてたからボロイところだと思ってた」

「いや、結構綺麗だよ、っ言うか見えてるし、」

「えっ、どれ？」

「あれ」

「アレじゃわかんねーよ」

「ほら、あそこの目の前のと」

「あれか」

「そうあれ」

「へっ、立派になって」
「昔に比べりゃ立派だねっ」

蒼井優華の指す道の先にあるマンションは6階建てで一回は何かのお店みたいな感じだった。

昔はあそこに二階建てのぼろアパートがちょこんと建ってたと思うけど今はそんなかけらは微塵もない。

確かにアパートと言うよりはマンションだ、

「あの一階の店はなんだ？」

「あれ、知らないの？」

「うん、知らない。」

「おじいさんが一階で喫茶店やってるのよ、」

「なにやってんだよじーちゃん」

「いいじゃない、繁盛してるんだし」

「そうなの？」

「うん、結構おいしくて評判なの」

「へっ、」

「私も好きだよ、おじいさんの特製コーヒー」

「へーじゃあ俺も淹れてもらおうっと、」

「じゃあ、早く行こ！ー！」

そう言つと蒼井優華は俺の手を取って走り出した……。

D r e a m 6 ～ E N D ～ ???

「あつ、一樹。言つの忘れたけど心の中じゃ私の事フルネームで呼んでるでしょ」

「えっ、何で知ってるの」

「そっ、そこは気にしない！！とりあえず優華って呼んでっていったでしょ」

「ええ心の中でもかよ、」

「そうよ！！わかった？」

「わかったよ、」

D r e a m : 7 「家での一幕」

カラン

パーーン

「うおあい!」

「「大沢一樹くん引つ越しおめでとー」」

蒼井ってい、じゃなかった。優華が勢い良くドアをあけるとそこにはクラッカーを持ったねーさんと我が爺こと大沢慎一と知らない人が数名、

「驚いた?一樹?」

ねーさんが尋ねてくる、

って待てよ。ねーさんは学校を出て逆方向にむかったはずだしここまではほぼ一步を道だし先回りできるはずがない、朝に続きまたしても……。

あの自転車のスペックが気になる……。

「あら、驚きすぎて声も出ない?」

知らない人Aが喋りかけてくる。

ええ、そりゃーある意味ね、

俺は心の中でつぶやいた。

「驚いてもらえりゃ、用意したかいがあるってもんだな、」

この人はとりあえず知らない人Bだな。

「えっと、失礼ですがどちら様で？」

「一樹、この人はね……」

「いいよ、優華ちゃん自分で言うよ、僕は町田 智也、歳は20で大学生だよ。ちなみに部屋は403だよ、ヨロシクな。」

「それと私は永井 美空303号室に住んでます。ちなみに智也とは恋人どうしです。」

知らない人Aが自己紹介をして町田さんに飛びついていった。

町田さんは急な飛びつきにもかかわらず持っていた飲み物をこぼすことなく永井さんを受け止めた。

「そして私は305号室に住んでいる菊池 怜奈、よろしく。」

新出の知らない人Cの自己紹介が終わる。

「そして私が601号室に住んでいる蒼井 優華です。改めてヨロシクね、一樹。」

優華が俺の前に出て自己紹介をする。

「一樹、ほら突っ立ってないでお前も自己紹介ぐらいしなさい。」

じーちゃんがせかす。

「えーっと、今度ここにお世話になることになりました大沢 一樹です。歳は17歳今現役の高校生です。始めての一人暮らしで右も左もわかりませんが皆さん、なにとぞご指導ください。」

「……よろしく。」

「ところで俺の部屋は何処なわけ、じーちゃん？」

「どこって言われても・・・空き部屋だらけだから何処でもいいんじゃないかな、」

「じゃあ俺と同じ階の部屋なんてどうだ？俺の階俺以外いないからさみしいんだよ、」

「あれゝ智也、いい歳して怖がってるの？」

「ちっ、違うつての、黙ってるよ美空。」

「あれゝ焦り具合がまたあやしゝ」

「違うつての、もう・・・」

「じゃあさ、私と一緒にの部屋に住まない？」

「蒼井っ何言い出してんだよ！！」

「一樹、苗字禁止！！」

「あつ、すまん。ってそんなことじゃなくてゝゝゝゝゝゝ」

「あれ優華、昼真から同棲宣言？」

「怜奈さゝん。今もうひるじゃありません。」

「いや、例えだから気にしないで、同棲宣言とは凄い事言い出すわね」

「そうですよ、私は怜奈さんと違ってちゃんと一樹っという彼氏がいますからゝ。」

「言ってくれたわね、優華！！」

「わゝ美空さゝん、怜奈さんが怒った。」

「だめよ、優華ちゃん怜奈は彼氏いないんだからゝ」

「美空！！優華！！死にたい？」

笑顔で拳を振るわす菊池さん・・・・・・・・・・

「じーちゃん、皆、愉快的な人だね？」

「疑問系じゃな、一樹、」

「まあ、彩さんが帰ってきたらもつとにぎやかになるぞゝ」

「彩さん？つてだれなんですか？町田さん、」

「あれ、ねーさん、まだいたんですか？」

「いたとは失礼ね！！誰も喋りかけてこないし、作者も喋らせないし読者も忘れてる頃だろうから、作者ぶっ飛ばして出てきちゃった、」

「一樹君、キミのお姉さんは何か”作者”とかなんとか不思議なことを言う人だね。」

「あつ、町田さんもわかります？言葉だけじゃなく言動も不審なんぐへっ」

いてゝ、ねーさん。いきなり右フックはきついです。俺って今日で殴られるの何回目かな？

「だつ、大丈夫か？一樹君？」

「ごっつ、ご心配有り難うゴザイマス。町田さん」

「そうか、それならいいんだけど、それと俺のことは下で呼んでくれるかな、苗字で呼ばれると何かこうこしょばいんだよ、」

「あつ、わかりました。じゃあこれからヨロシクおねがいします。

智也さん」

「そうそう、そう呼んでくれ、」

そんなこんだいろんなことがあつたけど一応俺の歓迎会っぽいものは結構遅くまで続いた。

部屋の件は優華がブチブチ文句を言っていたが流石に一緒には住めないのと同じ階の隣に住むって言うことで優華を納得させた。

そんなことで俺は今自分の部屋の602号室に居る。

このマンションは6階だけ構造が違って他の階は5部屋ずつあるのにこの階は2部屋しかない。

ってことはこの階には優華と実質2人だけかよ！！

ハメやがったな、あいつ。

それに周りの人も誰も教えてくれんとは、皆、絶対知ってたぞ・・・。

さて荷物の整理でもしようかねっと。

ぴんぽん

がちゃ

「あれ、鍵あいてるよ。無用心だな、一樹は。」

「おい、勝手に入ってくるか？普通。」

「まあ、私にとってはそのほうが都合いいけどね。って一樹まだ荷物片付けてないんだ。」

「おい、俺の話物の見事に無視ってるだろ、」

「まあ、片付けるのはあしたでいいじゃない、ご飯食べよ。私作ってあげる。」

「こいつ話聞かない気だな、」

「ん？何か言った？一樹、」

「ん、いやいいよ、もういいよ。」

「じゃあ台所借りるね。」

あゝもう、せっかく今日中に荷物片付けようと思ってたのに・・・。

こりゃ無理っばいな。

はあ～～～。

D r e a m - 8 「夕食時の一幕」

「「いただきます！！」」

「さっ、食べてみて、」

テーブルの上には優華が自分の部屋から持って来た食材で作った夕ご飯がある。

一人暮らしをしているだけあってテーブルの上に並べてある料理はどれも見た目はキレイだ。

でも、問題は味だな・・・・・・・・・・。

「さて、まずは一口毒見を・・・・・・・・。」

「毒見って何よ！！」

「冗談だよ、冗談。いただきます。」

うん、味も抜群だ。

こりゃうまいな、

「うん、うまいな、」

「ほんとに！！」

「ああ、うまい。」

「やった！！さすがは一樹。」

「じゃあ、私たちも貰いましょうか？智也」

「そうしようか、美空」

「「いただきます。」」

「ちよつとまつた！！！」

「一樹君、急に大声出すと驚くじゃないか」

「あつ、スミマセン智也さん」

「うん、それでよし、」

「じゃあ静かに言わしてもらいますけど何勝手に人の部屋入ってるんですか？」

「うん、いい質問だ一樹君。」

「いや、のんきに言ってるんで、」

「ん、ああ何で来たかって？」

「そうです。今はそこが話の本題です。」

「優華ちゃんに夕食どうですか？って誘われたから来たんだ、ね、美空」

「そうね、智也。優華ちゃん、招待ありがとうね。」

「いえ、あんまり慣れてないから味のほうは保証できませんけどね、」

「あら、味なら今旦那にお墨付き貰ったじゃない？」

「美空さん、一樹はまだ彼氏ですよ。旦那なんてまだ10日ぐらい早いですよ。」

「あれ？そうなの？私はもうそうゆう仲かと……………」

「あと少しですつつつ！！」

「じゃあ優華ちゃん、結婚式にはよんでね！！」

「もちろんです！！美空さん」

と、いう風に自分勝手に話している優華とその相手をしている永井さん。

その間はひたすらメシをくっている智也さん。

そんなに急いで食べるとノド詰まりますよ、って言ってるそばからあゝあ。

「ごっふっ f k y j b g v うい h v c ! !」

「だ、大丈夫ですか？智也さんっつ！！」

「一樹君、み、水を……」

「は、はい。水ですね。」

俺は台所に行き急いで水をくんでくる。

この非常事態にも女性陣は気づきもしない。

脅威の集中力だ！！

「はいつ、智也さん水です！！どうぞ！！」

「あ、ありがと。」

そう言う智也さんは水をさっきのご飯より早く飲み干す。

「ぷっはあゝ、生き返るうゝ」

「大丈夫でしたか？」

「いや、死にかけた、」

「そんなあつさり言うことですか？」

「ん？まあいいんじゃないの？」

「そんなんですか？」

「そういうもんなのさ、ところで一樹君？学校はどうだった？」

「もう初日から最悪ですね、あの人のせいで、」

そう言うて優華を小さく指でさす。

「最悪って何よ！！」

最悪という言葉に反応したのか？、指をさしたのが見えたのか？と
りあえず優華がこちらに来る。

「だって俺優華のせいで昼飯が食い損なつたし、午後の授業も受けられなかったかじゃん、」

「昼のアレは……、なんて言うかなあ〜？ん〜アレだよ、うん！！」

「なんだよ、いつたい」

「不可抗力つてヤツかなあ、あははははははっ」

「笑い事か！！転校初日から授業出れなかったじゃねーかよ、」

「大丈夫、その事は私とおねーちゃんと言いつつ訳しといたから、」

「お前とねーさんほどこの世に怖いものは居ないからな……、」

「ナイスなボヤキだ、一樹君」

「智也さん今は少し静かにしといてもらえますか？」

「はあ〜い、」

「ちなみに何て言つたんだ？」

「聞きたい？」

「いや、聞きたくないけど聞かなきゃいけない気がする、」

「じゃあ聞く？」

「じゃあ一応、」

「一樹は私の美貌に酔ってしまったって職員室で寝てます。つて言っておいたよ、」

「一樹君よりもっとナイスな優華ちゃん、」

「智也さん、お願いだから黙つてて、」

「はあ〜い」

「つていうのは冗談よ、ちゃんと気分が悪くなつたらしいので保健室で寝てますつて言つといたよ、」

「正確にはお前の”蹴り”でだけどな、」

「まあ、昔の事をグチグチ言う男は寒いよつつつ！！」

「一樹君？そんなに痛かったのかい？」

「カナリタイデスネ、”臨死体験”ツテヤツ力ナ、」

「それは苦勞したね、美空はそんな事ないから……………」

たぶん」

「何か思い当たる節でも？」

「いや、思い過ごし……だと思っケド、」

「なんか色々あるんですね、」

「いやいや、一樹君ほどではないよ、」

「俺達苦労しますね、」

「そうなるみたいだな、」

そういつて智也さんは苦笑した、

D r e a m - 9 「夕食後の一幕」

「『ゴチソウサマデシタ〜!!』」「」

「おいしかったね、美空」

「智也もこれ位まで料理の腕を上げてもらわないとね、」

「へえ〜智也さんって料理作るんですね、」

「そうだよ、美空がねまったく駄目なもんだから、」

「まったく駄目じゃ無いわよつつっ!!」

「あはははは、俺の家族と同じですね、」

「一樹君の家族は誰も作らないのかい？」

「はい、オヤジにもーさんもねーさんも誰も作ろうとしないから、

自分が作らないと死活問題になるっていうか、まあそんな感じです、

」

「一樹君も苦労してるんだねえ〜、」

「でも一樹、今度からは私が作るからゆっくりしててね、」

「いや、それは遠慮する、」

「なんでよつつっ!!」

「だって、、、」

ブルルルル、ブルルルル、ブルルルル

「あつ電話だ、私でるね、」

「おいっ、人の家の電話に勝手にでるなよ、、、」

「いいじゃん、いいじゃん。もしもし？大沢ですけど??」

「あつ、マジで出ちゃった、、、」

「あつ、なんだ美希じゃない、なに？」

「美希って誰だよ？知ってます？智也さん？」

「僕が知るわけじゃないか、一樹君」

「あゝ、やっぱそうですよねえ」

「あゝうん、分かったゝ伝えとく。それにしても美希もわざわざ大変ね、旦那はどうしたつてのよ？」

「あゝ、会話が聞けば聞くほどわかんねえ。」

「ここは気にせずビールでも飲んで、さっ、さ」

「あつ、有り難うゴザイマス、智也さんって飲めるかあああああああああ！！」

「おつ、一樹君。一人でツツコミかい？」

優雅な事を言いながら缶ビールのフタを開ける智也さん。

「えっ、何？叫び声が聞こえた？あゝ、気にしないで美希。こっちの事だから。」

以前正体不明なUnknownと交信をしている優華。

「はい、美空。」

「ありがとう、智也。んじゃ」

「カンパイ」

いつの間にか二人で宴会状態の智也さんと美空さん。

現在の状況。。。。

宴会状態の（バ？）カップル・・・一組。

長電話中の女の子・・・・・・・・一名。

結論

・・・・・・・・・・ここって俺の家だよね？

「はあ、落ち着くまで部屋の整理でもしとくかあ、」

俺が家の主のはずなのになぜかいろんな人に占領中な新しき我が家。初日からこんなでこれからどうなっちゃうんだろ・・・・・・・・。

・・・・・・・・まあ、考えてもしょうがないか、

「さっ部屋の整理、整理い」

俺は即興で作った変な歌を歌いながら部屋に残る引越しの荷物へと勝負を挑むのだった・・・。

~~~~~まあ大体一時間後くらいじゃねえ？~~~~~

「それじゃあ、オヤスミ」美希。明日学校で」

「えらい話してましたね、優華さんよ、」

「えっ？そうだった？10分くらいじゃない？」

「んなわけねーだろ、オイ」

すかさず突っ込むが本人は何も無かったという感じで智也さん達が食べ散らかした食器のあとかたづけを始めている。

一時間オーバーの電話を10分程度と勘違いする優華の感覚がすごいよ。ホントに。

てか俺、こんなこと突っ込んでる場合じゃないだろ！！



確かもっと大事な？ことが・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・事が？？

・・・あつそうそう！！

「なあ、優華なんでおまえ宛の電話が俺の家にかかって来るんだ？」

「えっ、ああ。アレね。あの電話一樹にだよ」

「俺に電話掛けてくるやつはオメーくらいだよ、」

「それは褒め言葉かなあ？？」

「どこを取ればだよ、でなんだったんだあ？」

「クラスの伝言だよ、委員長さんからあ、一樹ホームルームでないでしょ？だからその連絡。」

「出れなかったのは誰のせいだよ、一体さあ」

俺は優華を嫌味な目で睨んでみたが優華は苦笑いしながら床に寝転がっていた智也さんと美空さんを玄関から外に投げでしていた。つていいのかよつつつ！！仮にも人間だぞ！！

おつと失言、失言（笑）

「だつ誰のせいだろうねえ、委員長さんも大変だなあ、、はははははははあ」

「優華、今のアレでいいのか？？」

「いいんじゃないの？仮にもあの二人も人間ですから気づけば勝手に戻るって」

「まあ、それならいいけどさあ」

「でしょ？？じゃ、また明日迎えにくるねえ」

そう言うつと優華は玄関とは逆の方向に歩き出した。

「どこ行くんだ？優華？」

「どこつて帰るんだよ？」

「そつちはベランダだぞ？」

「あつ、言うの忘れてたけど繋げちゃったからベランダで、」

「はあ??」

それを聞いてベランダに急いで行つてみると、

「ない、板がない……………」

マンションにお住みの読者にはわかんと思うがベランダで隣の家との境目であるあの板がぼっかりないのだ。

「夜中に襲いにこないでね」

「行くかああああ!!」

「それじゃ、おやすみ」

そう言うつと優華は自分の部屋に戻つていった。

「なんでこうなつてるんだ…………?」

俺は板のなくなったベランダと荷物がまだ少し残る部屋を交互に見つめてため息をついた……………。



さてそろそろ起きないと遅刻だな、  
さて朝食でも食つかああ

その思考を最後に俺はベッドから立ち上がり寝室の扉を開けようとした時マジに思考が止まった。  
最後に見たのは勝手に開く部屋のドア。

そして最後に聞こえたのは知り合ったばかりの少女の声……

バンつつつっ!!

「一樹いいいいいい、朝だよおおおお!! っで何で床で寝てるのよ?」

「クソっ、優華、タイミング良すぎ……、」

そう言い放つと俺の意識は吹っ飛んだ。

\*\*\*\*\*

「腰、いてえ……」

「気にしない、気にしない、だからゴメンって言ってるじゃん」

皆さんお気づきだろうか?

説明していないのに状況が呑み込めるあなたはカナリすごい。  
ってか超能力者だ。どっかのテレビ局にその才能を売り込んできてほしいものだ。

さて、俺はいま一階にあるじーちゃんの喫茶店「レインボー」で朝

食中だ。

皆さんもわかるように部屋を出ようとしたその刹那何処からともなく俺の家に侵入していた優華の飛び蹴りによるなんとも強引としか思えないドアの開け方に俺のほうは天国のドアを開けかけてしまった。

30分ほどの気絶の後、俺の気絶を起すでもなくずーっと眺めていた優華を強制排除し着替えと用意を手早く済ませまだかたづけが済んでいない荷物を見て見ぬふりをして通り過ぎこうして一階で朝食に到達したという所存である。

「ははっ、一樹君も朝から災難だったねえ。」

「智也さん笑い事じゃないですよ、」

「ははっ、ごめんゴメン、でもたまにはいいじゃないか、、」

「たまつて、俺昨日来たばっかなんですけど?？」

「あれ??そうだったっけかなあぁ」

「ふあい、ふおれふえやふおふいふおつふおふあふあふいふえふあふえふふあふあ」

「一樹、食べながら喋らないで、」

「しょうがないだろ、急いでるんだから、、」

「それでも良く噛んで食べましょうね、一樹」

「……………急がせる原因作ったのは誰だよつつ、まった  
く」

「あはは、それ言われるときついなあー、おねーちゃん……………」

「いつからおまえは俺のねーさんになったんだ?？」

「その場のノリじゃないつつ、気にしないの!!」

「わかってるよ、ねーさんが二人いたら堪ったもんじゃないからな。  
。。」

「そーよねえ、私一樹と姉と弟の関係なんてやだしさあ」

「その発言は何か怖いな、」

「いいじゃない、いいじゃない。」

「ところで二人とも邪魔しちゃ悪いんだがちょっと良いかい?？」

「邪魔だと思ったのなら入ってこないでください」

「でもあれ・・・」

そう言う智也さんは顔だけを動かして視線を壁に向ける。

「あれって・・・?」

つられて俺達が智也さんの視線を追うと・・・

そう、智也さんが見ていたのは壁ではなかった、正確には壁にかかった時計だったのだ。

「うあああああ、遅刻!!」

「ね、言ったほうが良かったでしょ?」

珈琲をなんともいえない大人の雰囲気をかもし出しながら飲む智也さんに礼を告げると一目散に「れいんぼ」を出て俺より先にこの家の住人となっていたマウンテンバイクを引っ張り出すと学校に向ってこぎ始めた・・・けど、

「うう、重つつ」

「何よつつ!!可憐な乙女に対してその言葉は無いんじゃないの??」

「何でおまえが乗ってんだよつつ」

「何よ、私だって遅刻の瀬戸際なのよ、乗せてきなさい!!」

重いと思えば案の定優華が俺の自転車の後ろに器用に乗っているではないか・・・。

ここから学校までは確か微妙に登り坂だったはずでは・・・。

。

「なあ、俺に拒否権は??」

「無い。もちろん。」

「やっぱり??」

「も、男なら文句言わないでちやっちやとこぎなさいっ!!」

しょうがない、これ以上言い合いしても遅れるだけだな。

俺は仕方なしに優華を乗せて学校に向けて出発した。

頑張れ、一樹。負けるな、一樹。

学校に着いた暁には栄光が待っている!!（なんのだよっ!!）  
と一人で心の中でばやきに突っ込みで返してみるのだった。

あつ、ちなみに良い子のみんなは自転車で二人乗りなんてしちゃい  
かんぞ!!

D r e a m - 1 1 「学校にて学園祭…かも？」

「はあ、はあ、はあ、ああ〜もう疲れたつつつ！！」

「ハイハイ、ご苦労様。」

「よくもまあオレの苦労をそんなに簡単に、、、」

「ハイハイ、文句は跡で聞くからあ〜、早くしないと遅れちゃうよ」

「おい、ちよつと待てよ！！！」

そう言い残すと優華はダッシュで校舎の中に走っていった。  
俺も急いで自転車止めて教室行かなきゃヤバイぞ、、、

\*\*\*\*\*

「はあ、はあ、はあ、ああ〜もう疲れたつつつ！！」

「一樹、転校した次の日から遅刻か？」

「遅刻じゃねーよ、セーフだろ！！！」

「ギリギリな、」

「うつ、痛いところをつくなよな、、、」

あの後俺は自転車置き場につくなり適当に自転車を放り投げるとダッシュで教室に向かって走り、滑り込みでベルの鳴り終わる直前に教室に飛び込んだ。

ちっ、優華が朝蹴りを入れてこなけりやこんな目には…

そして俺を蹴り飛ばした張本人は自分の席で昨日のあ〜、朝倉だ、とかと余裕で喋ってやがるし。

「よっ！！和真、おはよーさん。それに転校生も！！！」

「委員長、おはよーさん」



「委員長?？」

「おつ、そういえば転校生 Do you remember e?」

「…………… why、なぜ?、どうしてここで英語が出てくる?」

俺も何でか第一声が英語になっちまったじゃねーか。

” どうーゆーりめんばーみー?” だと?

覚えてますか? 覚えてるわけねーだろ、まだ引越して三日も経ってねーよ。

てかこの小説11話まで来たのにまだ三日も経ってねーのかよっつっ!!

おい作者、時間の進み具合が遅くないか? まあ俺は全然かまわないのだが…………。

って俺はいつたい何を言っているんだ???

どうなってるんだよ、なんかわけわかんなくなってきたぞ…………。

あゝ、まあなんか返事はしといた方がいいよな、、、えゝつと…………、

「はあ??？」

10行も使って考え続けたにもかかわらず、のどの奥から出て来たのはそんな間抜けな声だった。

「気にするな転校生、俺は委員長こと柏倉 悠介よろしくな」

そう言つと委員長こと柏倉 悠介は俺に向かって深々とお辞儀をした。

んゝ、外見は失礼だが、委員長にはとてもなれそうではないのだが、顔はとても眼鏡がキマっていてまさに委員長といったキャラだな。

「こちらこそよろしく、委員長。俺は……」

自己紹介をしようと思っていた俺は委員長の次の一声で遮られた、

「聞くまでもない、大沢 一樹、」

「やっぱり委員長たるもの、転校生の名前は知ってるか、」

「いいや、そうじゃないさ」

「やっぱり委員長とかには転校生の情報は先に回るもんっつ……  
て違うのか?!」

「蒼井が言ってた通りだな、覚えてないのか……」

そう言った委員長は少し悲しそうな目をしていたんだと思う、  
でも俺にはその色を読み取れるほどの冷静さは少しも残ってはいな  
かった……

「も、もしかして委員長も俺をしってるのか?だからさっきあんな  
事言っただな、」

「知ってるかもなにも昔は良く……ってもそんなことも無いが、  
まあ世話になっただがなあ」

「そうなのか、すまん。優華から聞いてると思うが覚えてないん  
だな、これがよ」

「いや、きにするな。昔の事なんざ、覚えてない奴の方が大勢さ、  
」

「すまん……」

「だから気にしなさんなっつて、」

そんな重たい雰囲気の流れる中俺はあることに気づいた……  
。

「あれ？和真、なんでお前今日鞆持ってきてないんだ？」

いま、なんとなく委員長の顔を見ることができなくて回りに視線をそらして気がついた。

和真みたいにまったく持つてきていない奴や、いつもより格段に軽装備な奴とか、とにかく格段にみんなの様子が違う。

「なんでって今日から学園祭の準備期間だろ、お前、昨日昼に蒼井に気絶させられてHRに出れなかっただろ、だから委員長に連絡頼んだんだけど………??」

「聞いてない………」

ジト目で委員長を睨む。

俺はそんな事知らないから昨日優華に渡されたこのクラスの時間割を見ていつも通りのおもたあゝい鞆とおもたあゝあい優華（この部分は口に出したら確実に殺されるな（苦笑））を自転車に乗せてあの以外と地獄な坂を登って来たんだもんなあああ、

そんな今更今日は軽装備で良いですよと言われてもねええええ？怒っちゃいますよ？委員長？

と言う意味を込めて笑顔で睨みつける……。

「おっ、俺だって、昨日は忙しかったから美希に頼んだはずなんだよ………、なあ、

美希ちよつと!!」

そう言って委員長が大声で呼んだのは優華や、朝倉とかと話していたもう一人の女子だった、。

でも、待てよ………。美希？

どっかで??

いや?どこだ?どこかで聞いたんだが・・・。  
うゝむ、思いだせんぞ・・・・・・・・。。。

そうこうしてる内に美希と呼ばれた子が優華たちとこっちに来た。

「呼びましたか?悠介?」

「なあ美希、昨日一樹の家に電話して伝えてくれたよな??」

「えっ、ええ。確かに大沢君の家に電話したら・・・。そういえば優華がでしたわよね?」

「ああ、あの時一樹の家に居たのよ」

「あら?そうでしたの?」

ああ!!あれか!!昨日の夜の優華の長電話!!

どっかで聞いたと思ったたらそれかああ。あゝ、すっきりした。

「何で優華が大沢君の家の電話に出んのよ、」

おお!!いい所突いたな朝倉!!あんたここらの人間と違って常識あるねえええ。

「え?だつて一緒に住んでるし、当然でしょ??」

「あつ、そうなんだ、知らなかったあ」

おいおいおいおいおいおいおいおい!!そこ納得すんなよ!!

つてか一緒に住んでない!!

優華も嘘言つなつての!!

「それで、蒼井と喋って伝言忘れちまったのか」

「ああ、そう言えば伝言も頼まれていた気がしますわね、まあ良いじゃないですか、悠介」

「まあ、まあ忘れたからってどうって事ないんだから気にしないで良いわよ、美希」

「そうですね、蒼依の言う通りですわね」

「ああ、そういえば今日から本格的な準備だね、委員長頼むよ」

「まあ、適度に任せとけ、蒼井」

「おつ、委員長今年もやっぱあるのかい？」

ある？何があるんだ？和真は何いってるんだ？？

そういえば俺学園祭此処のクラス何やるのか聞いてないぞ。

「なあ、此処のクラスって何するんだ？？」

「あれ？一樹？私言つて無かったつけ？」

「聞いてないぞ」

「あら？優華も忘れっぽいですわね」

「此処は、女子で喫茶店。男子でゲーセンをするんだよ」

「おお！！さすが委員長。簡潔すぎる説明！！すばらしいですなあ  
ああ」

「ありがとつ、和真君。君は良き（？）理解者だ！！」

「へえ〜そうなんだ、知らなかった」

「おい一樹、普通に関心しないで俺らに何か突っ込んでくれよ」

「ああ、すまん和真。お前らが馬鹿らしくて寒心してたんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだ！！この沈黙は。

ヤバイぞ！！

カナリヤバイぞ！！

「おつ、そろそろベルが鳴るぞ、みんな席に着こうぜ！！」

「そうね、馬鹿な和真にしては良い事言っじゃない」

「では、行きましょうか？悠介」

「・・・おつ、おつ」

「ごめん一樹、フォローできないよ」

一同は口々に別れの一言を告げると早足で自分たちの席に戻って行った。

中でも一番キツかったのは、和真の

「・・・・・・ご愁傷様」

と言うどこか俺の不幸を楽しんでいるらしい和真の笑顔だった。

D r e a m 1 1 ～ E N D ～

## D r e a m - 1 2 「学園祭準備期間?! Part?」

「ええ、これから学園祭に関するホームルームをしたいとおもいまあゝす」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

「よっしゃあああああああ!!」

「良いぞー!!委員長!!」

「いよいよ来たぞおお!!学園祭だああ!!」

委員長の気の抜けた声にも関わらずクラスのメンバーはハイテンションだ。

俺はてつきり委員長は悠介一人と思いきやさつき委員長に呼ばれた美希つて子も一緒に教壇の上でやっていた。

「え、今年の文化祭は例年通り妨害工作など激しいバトルが繰り広げられると予想されます。だから皆気を付けるよあゝ」

バトル?!

学園祭の準備で激しいバトルが繰り広げられるってどんな学校だったっ!!

と口に出して委員長に多いに突っ込みたかったがそんな勇気も無かったので心のなかで叫ぶ。

そんな俺の心の葛藤をよそに委員長コンビは淡々と事務的な口調で説明を続けている。

「今年はこの校舎が全生徒たちの作品展示に使われますので、私たちはこの校舎を使えませんわ、ですので二年生は旧校舎B棟301と302を使うことになりましたわ」

「だからこれからの一週間は登校したら旧校舎のほうに直接向かうことゝ、わかったか？みんな？」

「ほぉーい」

「了解、委員長」

などと皆が勝手な事を言ってる間に一つ………。

”旧校舎B棟301と302”ってどこ？

今日だってこの教室にたどり着くのに優華に道を何回聞いたことか……。

って事で前の和真に当然質問。

「なあ、和真？旧校舎B棟301と302ってどこ？」

「ああ、あそこら辺だよ、」

と言って和真が指差したのは委員長達が喋ってる所の少し右横……  
・委員長達は真ん中で喋ってるので黒板の端の方だ……。

「何処だよ、黒板じゃん」

「甘いな、甘すぎる。目をよく凝らして見てみる」

そう言われてもう一度黒板を良く見てみる……

が、いくら見ても黒板には“勝つぞ！！”の一言のみが書かれていてそれ以外の文字や地図らしき物は見当たらない、、、、  
てか、学園祭のミーティングなのに“勝つぞ！！”はないんじゃないのか？体育祭なら分かるけど、、、、



「だから、何処に書いてあるんだよ？」

「書いてある？何を言っているのだね一樹くん、黒板をよーく見たまえ、黒板や壁が透けてその向こうの旧校舎が見えてくるだろう？」

ああ、つまりこのアホはこの校舎を出て黒板の方向に旧校舎があるって事を言う

のにこんなに遠回しな発言をしやがったのか……

はあ、このアホはつつつ！！

「そんな説明でわかるかあああああ！！」

全力で和真の頭に拳を入れた俺は、いつの間にか我を忘れて席から立ち上がってクラス全員の注目を集めていた。

「大沢君、私達の説明に何か不満でもあるのかしら？」

「まあ〜そうつつかかるなよ、美希。一樹だってまだ良く分からないに決まってるんだから〜」

「ま、まあそうですね……。とりあえず座っていただけませんかしら？」

「ああ……。すまん、ついテンションが上っちゃって……。…」

クラス中の注目を集め恥ずかしかったのでとりあえず言い分けを言っておく……。

「転校生も転校早々このテンションについてこれるとは分かるやつだなああ！！」

「いいぞ〜！！大沢ああ！！」

「最高だあああ！！」

クラスメイトは口々にこんな言葉を言い、何とか俺がテンションが上ってしまった・・・。

ということで納得してくれ、さらに褒め称えてくれた。

「お前のせいで恥掻いただろ」

「まあ、人の頭殴ったんだからそれくらいの代償はねえ？」

「元はといえばお前が悪いんだろ？お前が？」

そう言いながら俺は和真の肩を全力でひねり潰してやった。

「いでえでででででえで、いでえって」

「まあ、これも自分の罪の重さと思って実感しな」

「俺が何時罪をおおおいででで、すみませんでしたああああでで」

シラバツくれようとした和真の肩をさらにひねり潰してやると面白いうように悲鳴を上げた。

「ただちよつと面白く説明してやってただけじゃんかよお」

「面白くない、ちゃんと黒板の方向って言え！！」

「ああ、ちなみに旧校舎は正反对だよ」

「へー、つまり嘘かああああ」

「うん、嘘」（満面の笑み）

そのとき俺の中で何かがはじけた？様な気がした。

「覚悟は出来てんだろ？なあああああああ！！」

「だからなんの覚悟ですの？大沢君」

「あつ、いや、和真に向かって言っただよ・・・ははははは」  
気付くとまたまた立ち上がって和真に拳をいれる寸前で止まっていた・・・

「一樹、俺らが一生懸命説明してるんだから聞いてくれよぉ」  
「す、すまん。ちゃんと聞いてたよ、ちょっと和真がくだらねえ事を言ってきたもんだから・・・」

「悠介、なんか段々ムカついてきましたわ」

「美希も落ち着いて、ほらシワ増えるよ」

「悠介もなんかムカつきますわね」

「ほら、シワふえちゃうよ」

「悠介も覚悟はよろしいかしら？」

そう言うとき美希は子委員長を引っ張って教室の外に連れて行った。

その後、すぐ何か恐ろしいような音が聞こえたんだけど、うまく俺にはここに著す事ができない。それにたぶんクラス全員が聞こえてなかった（事にしかかった）と思う。

それほど恐ろしい音が聞こえていたんだと思う。

後で委員長に聞いてみようと思うが、まあその話はまた後で。

「皆さん、お待たせしてすみませんでしたわね、続きを始めましょうか」

数分して戻ってきた委員長は何か疲れきった表情で端に居る先生の隣に座り込んでしまった。

まるで慰められてるみたいだな。

ん？・・・・・・・・・・って先生居ただ！！

存在感薄いよ！！、それでいいのか先生！！

「では説明は以上ですわ。ですが一つ連絡事項が先生からありますので最後にもう少しだけ集中していただけますこと？　では、先生手短にお願いたしますわ」

つて、ちよと説明終わったのか？和真とか先生の存在感のなさに気を取られて全く聞いてなかったぞ。  
何すりゃいいのか全くわからねえ。

まあ、後で和真にでも聞かか。

「皆準備に気合いを入れるのは実に結構、結構なんだが・・・。  
この間の休み明けテストに赤点を取った者は準備期間を返上して補習を受けてもらう事となった。赤点など取る奴は居ないと先生は思ってたんだよねあ、職員室でも「私のクラスは大丈夫です」って言うっちゃったのにさあ結果を見てみりゃさあこのクラス赤点ランキング結構下なんだよねまあ赤点の自覚がある奴は覚悟しとけつつ！！今から名前を呼ぶからなつつつ！！呼ばれた奴は学園祭なんて楽しめないと思えよつつつ木村、寺谷、中本、植村、わかったか！！その四人だ！！」

「俺かあゝゝ、やつぱあ？」

「まあ、わかつていたがな」

「まあ、補習も悪くないかあ」

「そうそう、慣れれば楽しいしね、はははは」

名前を呼ばれた木村と寺谷と中本と植村と思われる四人の生徒はそれぞれ勝手な意見を述べている。

まあ、誰が誰だかまだよく分からないから喋ってる四人のうちどれ

が木村でどれが寺谷でどれが中本でどれが植村なのかはわからねえけどな。

「はあ、はあ、コイツ等は少しは反省でもしてくれよ、、先生の立場がさあ……………」

ああ、先生が落ち込んでらっしゃる、しかも息まで切らして…………。

あれだけ一気にまくしたてたらまあ、いきもきれるでしょうな、ウム。

先生はすごく疲れきった表情で端に居る委員長の隣に戻って行った。あゝあ、今度は逆に慰められてるみたいだな。なんかちよつと面白い図かもしれない。

「でわみなさん、各自持ち場について準備を始めてください!!」

その号令を合図にして一斉にみんなが持ち場に向かって解散して行った。

さあゝて、俺も頑張りますかあゝ

……………ところで俺何したらいいの？

まあ、行けば分かる……………か？

D r e a m 1 2 ~ E N D ~

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5873a/>

---

Eternal + dream.

2011年1月18日15時23分発行